

## 幡多医療圏を支える市民病院の役割発揮をめざして

四万十市長 田中 全

四万十市は、平成17年4月、旧中村市と旧西土佐村が合併して発足。人口約3万6千人。日本最後の清流四万十川の中・下流域にあたる。

中村は県西南部、幡多医療圏（人口約10万人）の中心地。かつては圏域に中村市立市民病院（現四万十市立）と2つの県立病院（西南、宿毛）が鼎立。地域医療を支えてきた。

平成11年、2つの県立病院が統合され、隣接する宿毛市に幡多けんみん病院（355床）が設立されてからは、けんみん病院の中核病院としての役割が明確になった。

市内では、愛媛県に隣接する中山間地、西土佐地域は、かつて住民が主体になった保健予防活動において先進的な実績をあげており、その拠点となった保健センターと診療所（医師2名）は健在であるが、過疎、高齢化が進む中、住民主体は限界にきている。

中村地域では、市街地に民間病院、診療所も多い中、市民病院は新たな役割発揮に苦しんでいる。

市民病院（前身）は昭和27年設立。ピーク時の平成9年に18名（130床）いた常勤医師は、新臨床医研修制度が始まった平成16年以降、急激に減少。現在は7名（97床）。平成19年、救急医療を返上、2つの付属診療所も廃止した。

病院経営の赤字、財政投入（赤字補てん）をめぐる市議会での議論が高まる中、平成20年度、市民病院改革プランを策定。内容は、独立採算を徹底し、経営形態の見直しも視野に入れて、今後財政投入は行なわないとするものであった。

市民の間で病院存続の不安が高まり、平成21年、新たに市長に就任した私は、改革プランを見直し、病院をいまの経営形態で存続させるために必要な財政投入は行なうことを明記。

現在の市民病院の診療科目は、内科、外科、整形外科、脳外科の4科（泌尿器科は休診中）。1日平均外来200人、入院70人。市内だけでなく、東に隣接する黒潮町の住民の利用も多い。

医師不足とあわせ、問題なのが高知市周辺への医師の偏在。現在、夜間救急は幡多けんみん病院に集中しているが、同病院においても医師は減少している。独立した幡多医療圏を維持するためにも、同病院との連携が不可欠であり、そこでこそ市民病院の役割や特徴が発揮できるものと考えている。

幸い、市民病院に対して、地元医師会や国立高知病院等からの非常勤医師派遣も行なわれるようになり、これまでなかったネットワークも広がりつつある。

市民病院の特徴は、呼吸器疾患治療、糖尿病治療、人工透析等に強いことや、脳外科医2名を維持していること。今年度から、市の保健・医療・福祉連携事業の一環として、脳ドッグ（市が費用の8割を補助）を開始したところ、すぐに年間定員いっぱいになった。

いまの体制を維持することにより、新たな展望が見えてくるものと信じている。

2011年6月

第51回 全国国保地域医療学会

国保直診開設者サミット

「開設者の本音と決意～おらんくの地域医療～」

発言予定原稿（要約）

開催日 11月11, 12日

開催地 高知市